

双塔



新潟教会 2014年12月

No. 319

人に平和

助任司祭 ナジ・エデルベルトゥス

最近弱くなった鳥を何羽か見つけたことがあります。病気で飛べなくなる鳥もいれば、風のあまり通らない木の低い枝に止まって猫にやられた鳥も見ました。寒くなると鳥達も逃げ道を考えます。野生の鳥には予防注射がなく防寒のためにも羽の生え替わりが遅れると、そこまでです。寒い冬の間、聖マルチノのような人と出会い幸いです…。

隣れみある聖マルチノと言えば、新美南吉の狐の話を思い出す方もいると思います。愛知県の半田市にいた時、この童話をたまたま聞きました。色々な形に化けることが出来る狐で、人間を困らせることもある狐の話です。その狐の家族にも子供がいて、冬の寒さで困りました。考えに考えを重ね、狐の子は手袋を売るおばさまの所に行くことにしたそうです。人間の子供に化けて手袋を買いに行きましたが、やっぱり隠し忘れた部分があります。お金を払おうとした時に出した手は、狐の前足でした。おばさまは犯罪人に向かう心のような形になりますが、やっぱり冬の辛さを考えて怒らず、黙ってお金を受け取り、手袋を渡しました。冬は、狐にもきついで、おばさまも子狐にゆるしを伴って手袋を渡したのです。心なしに物を渡すことは簡単ですが、敵にゆるしを伴って救いを願うことは難しいですね。

さて馬[午]年はもう少し残っています。上手く行かなかったことが沢山あった、と感じている方もいるかもしれません。しかし、上手くいかなかったことを見つけることは恵みの始まりです。その何をするかさらに良いことが重なります。12月とは師走と呼ばれますが、極月(ごくげつ)と呼ばれることもあるそうです。どうして極月と呼ばれるのか、自分は分かりませんが、キリスト信者には目を覚ましなさいと云う呼びかけに答える月になるので、俳句の中で書いてある通りに使う事にします。

「私達の救いの完成は前より近い」(ロマ 13・11)、とパウロはわざと付け加えました。前よりイエス様の言葉に耳を傾け、それを生かして行く人は幸いです。長い山上の説教の最後の部分に「御言葉を聞いて、行こう者は岩の上に家を建てた賢い人に似ている」(マタイ 7・24～)という譬えがあったように、待降節の間の聖書朗読もキリスト者が前より賢い者になるようにイエス様の望みをあらたに聞かせてくださいます。山や村を超えてエリザベトを訪問するマリア様やベトレヘムへのヨセフの長い旅などを新たに聞くことができるので、寒さや忙しさに負けずに共同体の集会に参加して欲しいと思います。若い羊飼いのようにふとこころが寒くても、吹き笛を持って清い心で人間と神の和解のために来られる幼子を出迎えましょう。平和と喜びの籠ったクリスマスカードを届ける郵便配達を含めて、降誕節を早く迎える人達(商売人)にも平和がありますように(ルカ 10・5) …。





そよかせ便り



■信仰養成講座 第二回 (新潟地区協・新潟教会 共催) ----- 10月25日(土) -----

前週の18日(土)に引き続き、菊地司教様による2回目の信仰養成講座が、信徒会館で行われた。「福音宣教とは、この世界に神の国を現在化することである」しかし、「現実の社会的次元を掴んでいないと歪曲される」と歯切れよく始められ、教皇フランシスコの使徒的勧告『福音の喜び』から「貧しい人々、小さい人々」に光りを当てて話された。居心地のよさを求める文化が「無関心のグローバル化を推し進め」、貧しい人々が周辺に追いやられるなどという次元を超えて、排除されてしまっている。世界では8人に1人が慢性的に空腹の状態であり、日本では食糧輸入の1/3を廃棄しているのが現実であると話された。

■死者の日(ナジ神父様霊的花束贈呈) ----- 11月2日(日) -----

ラウル神父様は、説教で「死者の日」は悲しい日でないが、入祭の歌は聞きたくない。私たちに、死は必ず訪れる。使徒ヨハネが語るように、天の国は、涙も、労苦も、死も無くなる。死は私たちにとって、人生の終わりではなく、永遠の命の入り口である。だが、私たちの信仰は弱い」と話され、「今日のミサは、亡くなられた方のために捧げると同時に、私たちの信仰が強まるように願わなければならない」、「死者の日」は、神様と出会える大切な時期。人生は各駅停車で旅をするようなもの、終点は神様です。感謝をもって旅が続けられるように願いましょう」と、締めくくられた。ミサ後、11月1日(諸聖人の祭日)に霊名の祝日を迎えられたナジ神父様に霊的花束が贈られた。

■ラテラン教会の献堂 (七五三のミサ・新潟教会ミニ・バザー) ----- 11月9日(日) -----

快晴の日曜日。ミサの終わりに、七五三の子供たちがラウル神父様から祝福を受け、一人一人にお土産が渡された。ミサ後は、信徒会館でミニ・バザーが開催。窓ガラスに千代紙の枯葉が飾られ、会場内は、手作りのリンゴジャムにクッキー、ひじきの煮つけや笹団子…、手作りアクセサリーや寄付の品々が並び、お買い物の人でにぎわった。談話室の喫茶コーナーでは、サンドイッチや焼きそばを食べながら、買い物袋の中身を見せ合ったり、お話ししたり、笑顔がいっぱい♪

準備して下さった総務部のみなさん、心からありがとうございました！！



インフォメーション!



●『ミサ典礼書』 奉献文に「聖ヨセフ」の名を(菊地司教様のblogより)

11月1日から、ミサ中の奉献文(第二から第四)において、『聖ヨセフ』の名称を挿入する変更が実施されています。奉献文は司祭が唱えるところですが、聖変化のあと、聖マリアから始まって聖人や天使の名前を呼ぶ部分において、『聖ヨセフ』の名前を加えることが、2013年5月1日の教皇庁典礼秘跡省の教令で決められました。ミサ中に司祭が、「聖マリア」に続いて「聖ヨセフ」と唱えることになっていますので、注意してお聞きください。なお第一奉献文には以前から掲載されていますが、今回の他の奉献文の変更に合わせて、第一奉献文でも『聖ヨセフ』とだけ唱えることになりました。

●ミサ中の聖体拝領に関する指針(カトリック新聞オンラインから)

今年の待降節第1主日(11月30日)から、「日本におけるミサ中の聖体拝領の方法に関する指針」(以下「指針」)が発効する。「指針」の目的は、聖体を受ける方法や動作を通して、聖体拝領の意義や聖体に対する信仰と尊厳がしるしとして示されていることを明らかにし、信者が不安や混乱なく拝領できるようにすること。2010年2月の臨時司教総会で認可され、今年6月に教皇庁典礼秘跡省の認証を受けた。具体的には以下の点などが記されている。

- ▼日本では原則として立って拝領する。
- ▼聖別されたパンを手で受けるか口で受けるかを拝領者が選べる。
- ▼聖体を授与する際に奉仕者は、ホスティアの場合は「キリストの御からだ」、御血の場合は「キリストの御血」と言う。
- ▼司祭以外の者が祭壇上のカリスを取って御血を拝領すること、自分で御血にホスティアを浸して拝領すること、カリスを次の拝領者に手渡すことはできない。
- ▼聖体拝領に関するカテケーシスを行う。

カトリック新潟教会 月刊「双塔」 毎月1回 最終日曜日発行 編集・発行 / カトリック新潟教会 教会運営委員会 広報部
〒951-8106 新潟市中央区東大畑通一番町 656 TEL : 025-222-5024 FAX : 025-222-5054 <http://www.niigatacathedral.org>

